



2階の展示室には茶室も。加島美術では空間コーディネートのアドバイスまで含めた販売をしており、洋室なら1階、和室なら2階と、住空間をイメージしやすい内装。

「入口はひとりの作家であっても、その時代や交友関係など興味を広げると、より美術がおもしろくなる」と語る加島美術さん。



池大雅《二行書 春風》
江戸時代(18世紀)
紙本墨書
画面136×28cm
(全体188×40cm) 35万円



加島美術1階の広々とした展示室。中央手前は蕭白、壁の一番左は土佐光起、その隣に若冲など巨匠作品が並ぶ。ガラスケース越しではなく、間近で名作を鑑賞できるのも画廊ならではの魅力だ。この見聞きの掲載作品はすべて「美祭-BISAI-」出品作。
撮影=広瀬達郎[本誌](内観、ポートレート)

「芸術新潮特別企画」

加島美術が受け継ぎたい 伝統と暮らす愉悦

今 月号で特集した伊藤若冲が広く注目されるようになったのは、2000年に開催された「没後200年若冲」展(於・京都国立博物館)がきっかけである。若冲に対する人々の関心は裾野を広げ、美術史家・辻惟雄が「奇想の画家」と呼んで早くから紹介してきた曾我蕭白や長澤蘆雪、歌川国芳などにも及ぶ。さらに長谷川等伯、河鍋晩斎……と日本美術ブームはますます高まるいつぼうだ。

彼らの作品は特別なもので縁遠い、わたしたちにはそんな先入観があり、基本的には美術館で楽しむばかりだろう。だが「権力者だけでなく市井の人びとも求め、愛で、次世代へ受け継いできたからこそ、多くの作品が残りました。多様な作品が現存することで学術的研究にも寄与しています」と語るのは、加島美術の代表を務める加島林衛さん。美術館の展覧会へも数々の作品を送り出す同画廊は、近世の書画を中心に、近代の作品まで幅広く扱っている。その経験をおして、一般の人たちに大切にされた美を多く目にしてきた。加島さんは「床の間がないから軸物は飾れない」と考えがちですが、現代のマンションでもじゅうぶん楽しむことができます」とも言う。それは加島美術を訪ねると分かる。大きなガラス越しに中が覗けるこの画廊はまず、外観からして古美術から想像する敷居の高さがない。そして一歩足を踏み入れると、現代的な空間に古画がしっとり溶け込んでいる。購入者の作品選びにも丁寧に対応

伊藤若冲《鶴図》 江戸時代(18世紀) 紙本墨画
画面125×53cm(全体214×65cm) 280万円



円山応挙《鯉魚門》 江戸時代(18世紀) 紙本墨画
画面130×38cm(全体208×52cm) 130万円



遠水御舟《青梅ノ図》 紙本着色 共箱つき
画面43×38cm(全体113×51cm) 130万円
価格はお問合わせください。



川合玉堂《溪村早春》 紙本着色 共箱つき
画面49×60cm(全体55×76cm) 300万円



Information



加島美術

住所 東京都中央区京橋3-3-2
TEL 03-3276-0700 FAX 03-3276-0701
開廊時間 10:00~18:00
定休日 日曜、祝日
www.kashima-arts.co.jp

「美祭-BISAI-」4月25日~5月6日 会期中無休
近世から近代まで400点以上の書画を出品。カタログ掲載のみで会場では展示されていない作品も希望すれば観覧できる。全出品作を掲載する「美祭-BISAI-」カタログの請求は電話、FAX、ホームページにて。

しており、ひとりの作家の作品を1点だけでなく数点見比べて選んでもらうことに重きを置く。「モチーフはもちろん、細部の表現までじっくり眺めてもらうことで、好みの方向性をご自身で見つけ出してもらいたい。それが作品を長く愛してもらいたい」からだ。

加島美術では、4月の下旬から「美祭-BISAI-」展を開催する。毎年春と秋に開催されるこの展示即売会には400点以上が出品される。狩野派や若冲、蕭白、池大雅、横山大観、竹内栖鳳、堂本印象などの絵画作品……。さらに頼山陽、勝海舟や与謝野晶子らの書……。大家たちの作品にたっぷり触れられる好機だ。